

北魏女性墓誌の特徴語の抽出および語義考証

大知, 聖子
名城大学

<https://doi.org/10.15017/7324221>

出版情報：九州大学東洋史論集. 51, pp.1-27, 2024-03-28. The Association of Oriental History, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



北魏女性墓誌の特徴語の抽出 および語義考証

おお ち せい こ
大 知 聖 子

はじめに

近年、中国史においても従来の女性史の枠をこえたジェンダー史の成果が増えつつある。中でも小浜正子氏を中心としたグループによって中国ジェンダー史研究の成果が陸続と出版されていることが注目される⁽¹⁾。

本稿が対象とする時代の研究状況については、小浜正子編『中国ジェンダー史研究入門』の中で下倉渉氏が漢唐間の女性史研究を概括したものが参考になる⁽²⁾。これによれば、従来の漢から唐までの女性史研究において女性を抑圧する儒教倫理の強化および婚姻制度の父系化が指摘されているが、その一方で非儒教精神文化および北族世界の習俗に由来する女性の「闊達さ」「強さ」「自由さ」があったことが指摘されている。下倉氏はこのことを「矛盾」ととらえたうえで、こうした研究の「矛盾」が生じる要因および解決策について、これまでの研究で用いられてきた女性の地位が高かった／低かったなど程度の差の評価による形容詞的説明法には限界があり、ジェンダー的な視点によって性差の構造・秩序を名詞的に説明し、時期ごとの特異な「型」を記述することで一段階上の比較史が可能になるのではないかと説く。筆者もジェンダーの視点を導入すべきであるという点については大いに同感である。しかし、恣意的な印象論に陥らずに比較可能な形で「時期ごとの特異な『型』」を示すのは実際には容易なことではないだろう。「型」を比較可能な形で示す具体的な手法について下倉氏は言及していないが、厳密な手法を用いなければ、結局のところ研究者ごとに判断基準のずれが生じ、形容詞的説明法と同様に比較困難という問題が起きてしまうのではないだろうか。

このような形容詞的説明法の問題点については歴史学のみならず、社会

学の分野でも指摘されている。左古輝氏は、従来の研究は何が多い／少ない、増えた／減った…などは基準を明示せずに断定することが当然だったが、その妥当性すら認識されていなかった、との見解を述べている⁽³⁾。左古氏は形容詞的説明それ自体よりも、判断基準が明示されていないことを問題視している。従来の中国女性史研究を比較することが困難であるという問題についても、その核心は形容詞／名詞という品詞の表現それ自体ではなく、比較可能・反証可能な判断基準が明示されていないことそこにあるように思われる。基準の問題に対する対処法として左古氏は、一律に当てはめるべき基準は存在しないと断りつつも、計読分析⁽⁴⁾を通して分析者が必要に応じてデータや分析方法を明示することを提案している。筆者も人文学が科学的であるためには計読が欠かせない手法であると考えているため、本稿でもテキストマイニングという計読の手法を積極的活用する⁽⁵⁾。具体的には、テキストマイニングによって北魏女性墓誌の銘辞部分の特徴語を抽出し、語義の考証を行い、当時の北魏墓誌を作成する社会階層の女性に期待されていたジェンダーロール（性別による社会的役割）について考察する。

第一章 北魏女性墓誌研究と問題点

本稿が対象とする北魏時代はいわゆる「征服王朝」である。儒教文化を受け継ぐ「漢人」と、これと異なるジェンダー習俗があったとされる北族の「胡人」が共同で王朝を形成する過程は、中国史上のジェンダーロールの構築と正当化を検討するうえで意義がある。北魏の女性に対するジェンダーロールを検討するうえで主要な史料となるのは、文献史料である『魏書』皇后伝や列女伝、および出土石刻史料である墓誌などである。このうち墓誌は取り立てて傑出した業績のない上流階級の人物を称揚するために書かれたものが大部分を占める。そのため、『魏書』と比べて一般的な女性に対するジェンダーロールを知るのに有利である。

その重要性に反して北魏女性墓誌を全面的に扱った研究はまだそれほど多くない。管見の限り、現時点では墓誌の文体について研究する馬立軍氏の研究が北魏墓誌の女性の表象について最もまとまった研究成果であるといえる⁽⁶⁾。この他に黄薔氏の修士論文は比較的多数の女性墓誌を用いてパーソナリティの類型化を試みたものであり、注目に値する。黄氏は該当する

事例をあげながら、北朝女性墓誌には1. 賢婦、2. 才女、3. 佳人、4. 寡婦の四類型があるとする⁽⁷⁾。また、墓誌などを用いてさほど著名でない、ある宮女の一生をミクロストリアの手法で叙述した羅新氏の研究もある⁽⁸⁾。

本稿と最も関連するのは馬氏の研究である。馬氏は北朝墓誌の銘辞の内容を分析し、墓主によって重点に差はあれども北朝墓誌の人物造詣は男女ともに礼法が本位であることを指摘している。さらに、女性墓誌の場合「四徳」「六行」といった礼法が軸でありながらも、この価値観とは対立する見目の美しさや才能学識が賛美されていることが注目されるとし、北朝女性墓誌の作者の心中には、才学・美貌と四徳・六行のすべてにおいて墓主の才知が突出していることが重要な基準となっているとする⁽⁹⁾。これは概ね適切な指摘であり、この点については本稿でも再確認されるが、以下のような不十分な点も残る。

馬氏の研究を含め従来の研究は計量的分析手法が用いられておらず、数例の史料を引用し、それらの特徴から一般化している。この方法には引用されている史料がたまたま研究者の目に止まったものなのか、それとも大量の史料を精査した結果、典型的なものとして選ばれたものなのか、また典型として選んだのであれば、なぜそれが典型といえるのかは曖昧なままであるという問題がある⁽¹⁰⁾。そのため、計量的分析によって比較および反証可能な形で検証する必要がある。どのくらいの母数のなかでどのくらいの事例があるのかを示すことで論拠の信頼性がどの程度であるか目安を示すことができる。また、ジェンダーロールを検討するためには、儒教的礼法という概括的な説明のみではなく、具体的にどの行動・性質が最も賞賛されているのかを詳細に検討する必要がある。計量的分析を用いることによって、礼法のなかで具体的にどのような行動が最も多く評価されているのか、才学・美貌を賞賛するうえで最も多い表現は具体的に何であるのかといった点も検討することが可能になるだろう。

第二章 テキストマイニングを用いた北魏墓誌の銘辞の分析方法

本稿で扱う北魏墓誌は、2012年の段階では年代が判明する北魏墓誌は556件が目録化されている⁽¹¹⁾。これに加えて、筆者が目録化した北魏墓誌が2023年の段階でさらに97件ある⁽¹²⁾。北魏墓誌の形式は、基本的に散文形式

の序文と韻文形式の銘辞から構成される。墓誌の内容は題・名前・本籍・家系・品行・官歴・死亡日・享年・埋葬（以上が序文）・銘辞（本文）であり、基本的にこの順番で定型化される⁽¹³⁾。序文と銘辞の内容は部分的に関連しており、銘辞は基本的には序文に記された具体的な家系・品行・官歴・享年などの事実をもとに、より抽象的な韻文によって墓主への賞賛と墓主の死の悲しみといった感情を表現するものとなっている。序文には墓主の具体的な情報が記されるため、地名・官職名・氏族など固有名詞が集中しており、ジェンダーロールに関連する語は賞賛と哀悼を表現する銘辞に集中している。そこで本稿では銘辞を分析対象とした。

分析するテキストは出版された墓誌の図録の釈文を一部図版によって修正しながらキーボード入力し、電子化したものを用いた。本稿では墓誌の銘辞を分析するために日本語用自然言語処理プログラム MeCab および計量テキスト分析ソフト KH Coder を用いた。テキスト分析の核となる考え方は、文字や文の成分（POS）などの出現回数を数え上げ、文の特徴を統計的に分析しようというものである。KH Coder は内部で自然言語処理ソフト MeCab 等によって文を区切り、統計ソフト R によって数え上げている。

MeCab は日本語用のソフトウェアではあるが辞書を編集することで様々なテキストを成分に分割することが可能である。北魏墓誌の銘辞は一句四文字で構成され、その中で二文字ごとに意味のまとまりがある。そこで、北魏墓誌の銘辞の語彙をすべて二文字熟語の名詞として辞書を作成し、MeCab に適用した⁽¹⁴⁾。この MeCab を KH Coder で実行し、分析及び可視化を行った⁽¹⁵⁾。

その結果、北魏墓誌の銘辞全体から二文字熟語として 19339 語抽出することができた。内訳としては、2 回以上使われた熟語は 3386 語（約 17%）であり、残る約 83% は一回のみの使用であった⁽¹⁶⁾。つまり、一人の人物の銘辞の中で使われている語は平均して 8 割以上が北魏墓誌の銘文全体の中で一度きりしか使われていない語であるということである⁽¹⁷⁾。また、複数回使用される語の中でも、2 例が 1966 例、3 例が 628 例と 2～3 例が大部分を占めており、4 例以上の用例のある語は約 2% しかない。窪添慶文氏の研究によれば北魏墓誌の銘辞の語句の長さは、北魏墓誌が急増する洛陽遷都（494 年）後から永平年間の終わり（512 年）までは平均 24.8 句（二文字熟語として 49.6 語）、延昌の始まり（512 年）から北魏末（534 年）までは平均 31.6 句（二文字熟語として 63.2 語）である⁽¹⁸⁾。これをもとに単純計算

すると、一人当たり49.6～63.2語のうち約10～12語が他の墓誌でも用例のある語であり、4以上の用例のある語は約1.2～1.5語しかない。このように、複数の銘辞で使われる語は極めて限られているが、非常に多くの墓誌で用いられる語も存在する。例をあげれば「德音」や「玄石」は35回、「玉潤」や「金声」や「清風」は21回も使用されている。

第三章 北魏女性墓誌の銘辞の特徴語

前述のようにほとんどの銘辞部分の語は北魏墓誌全体で一度しか使われないが、ごく一部に比較的多くの用例がある語も存在する。そのような語のうち性別を問わず用いられる語の外に、男性のみあるいは女性のみに頻繁に用いられる語が存在する。北魏墓誌で用いられるいくつかの語は性別に関連しており、類似する銘辞のクラスターを分析した結果、同一作者による文章の再利用が疑われる極めて高い類似性のクラスターを除けば⁽¹⁹⁾、同じ性別の墓主の銘辞が比較的高い類似性のクラスターを形成しており、男女で用語の傾向が異なることが示唆された点にも表れている⁽²⁰⁾。本稿ではこの結果を踏まえ KH Coder の対応分析を用いて男女の表現の差を可視化し、北魏女性墓誌の特徴語を抽出した。KH Coder は内部で R の Correspondence Analysis を用いて計算・可視化しており、設定したグループと語の関連の強さを距離によって表示させることができる⁽²¹⁾。ここでは、男女の銘辞を伴う墓誌を分析の対象とし、男性グループと女性グループを設定し、夫婦合葬墓は分析の対象から除外している。なお、対応分析に際して男女の墓誌は母数が異なるため標準化を行っている。女性墓誌は全体の件数が少ないため、4回以上の出現する語は頻繁に使用される語であるといえる。分析対象とした件数は、男性は359人分、女性は88人分となった⁽²²⁾。これによって図（北魏墓誌の銘辞の男女別対応分析）が得られた。この図では原点（0、0）付近には男女双方に用いられる語が集まり、中央から離れるほど特徴的な語となる。左下が女性特有の語となっている。

図の男女の表象の対応分析から、女性の表象として最も特徴的な語に「四徳」（女性17例、男性0例）、「六行」（女性11例、男性0例）、「夫人」（女性10例、男性0例）、「作嬪」（女性6例、男性0例）、「母儀」（女性6例、男性0例）、「娣姒」（女性4例、男性0例）、「慎終」（女性4例、男性0例）、「婦德」（女性4例、男性0例）、「淑媛」（女性4例、男性0例）、「蘭蕙」（女

性4例、男性1例)、「四行」(女性4例、男性0例)、「四教」(女性4例、男性0例)の12語が検出される。次いで「窈窕」(女性9例、男性1例)、「有行」(女性9例、男性1例)の2語も女性に特徴的な語である。これらはいずれも男性墓誌には使用されないか、極めて稀にしか使用されないが、高い頻度で女性墓誌に使用される、いわば女性の紋切り型的美徳であり、墓誌の称揚する女性のジェンダーロールの代表例であるといえよう。

以下ではこのうち、複数の意味を持つ熟語や形容詞的な熟語に該当する六語について取り上げ、その意味を明確にする。なお、前述のように北魏墓誌の序文と銘辞は部分的に内容が関連しているため、序文の中にも、銘辞と同一の語が用いられる場合もある。そこで、序文にこれらの語が用いられる例についても参考として検討に加える。さらに前後の時代の正史や石刻史料などと比較することで、北魏女性墓誌の特徴語の由来や独自性についても検討する。

(1) 娣姒

まず娣姒について検討する。この語の南北朝期の用例をみると、北齊の顔之推『顔氏家訓』兄弟に、「娣姒之比兄弟、則疏薄矣(兄弟の妻たちは兄弟に比べれば関係は疎遠である)」とあり、劉宋の劉義慶『世說新語』賢媛に、「鍾郝爲娣姒、雅相親重(鍾夫人と王渾の弟の王湛の妻である郝夫人は兄嫁・弟嫁の間柄であり、平素から互いに親しみ敬いあっていた)」があり、どちらも兄弟の妻(弟嫁と兄嫁)を意味する。しかし、【漢魏六朝WEB】⁽²³⁾は司馬景和妻孟敬訓墓誌の序文にある「接娣姒以謙慈作稱(娣姒に接する様子が謙虚で慈愛に満ちていたので称賛された)」に対して、「謂夫人謙和慈祥而不跋扈、不嫉妒。在一夫多妻制時代、是維持家庭和諧、避免内亂的要婦德之一(夫人の謙和慈祥して跋扈せず嫉妬しないことをいう。一夫多妻制の時代において、これは家庭を維持して調和させ、内輪争いを避けるための婦人の徳の一つである)」とし、娣姒を兄弟の妻ではなく、一夫多妻、つまり夫の別の妻と解釈する。ここでは「一夫多妻」とするが、司馬景和が一夫多妻であった根拠を示していない上、そもそも伝統中国社会の原則は一貫して「一夫一妻多妾制」であり北朝も例外ではないため、「一夫多妻」という前提そのものが不適當である。ただし娣姒には妾の意味もあるため、北魏墓誌における娣姒の用例について表1-1の8件を検討し、意味を判断したい。この表によれば銘辞は4件あり、事例3・4・6・8

が該当する。1は、妻が清河の孟氏（漢人）、夫が司馬景和（漢人）である。『魏書』卷三七、司馬叔璠伝附景和に、「道壽長子元興、襲父爵。子景和…」とあり子の記載はあるが、兄弟の記載はない。本人墓誌は司馬炳墓誌【梶山目録238】が該当するがここでも兄弟の記載はない。しかし1の文脈を確認すると最初に「奉舅姑以恭孝興名、接娣姒以謙慈作稱」と舅姑と娣姒が対句になっており、その後に「夫人性寡妬嫉」とここではじめて妻妾間の関係について言及されるので、娣姒は夫の兄弟の妻と解釈することが妥当である。2は、妻が博陵の崔氏（漢人）、夫が趙郡の李氏（漢人）である。『魏書』卷四九、李靈伝に附伝があり、二人の子および二人の兄と一人の弟がいたこと、その兄弟には子がいたことが記載されている。つまり夫の兄弟の妻は存在したことが分かる。また2の文脈を確認すると姑と娣姒が対になっており、娣姒は夫の兄弟の妻と取れる。3は、妻が南陽の趙氏（漢人）、夫が宗室の元永の長子である。『魏書』に記載はなく、関連墓誌もないが、銘辞では「上虔舅姑、傍協娣姒」と表現され、舅姑と娣姒が対句になっているため、兄弟の妻と取れる。4は、妻が漁陽の鮮于氏（胡人）⁽²⁴⁾、夫が丘哲（胡人）⁽²⁵⁾である。銘辞では「徳は娣姒を予（＝柔）ぐ」とあり、兄弟の妻もしくは妾のどちらとも取れる表現である。5は、妻が河東の薛氏（漢人）、夫が宗室の元湛である。元湛墓誌【梶山目録437】では「章武武莊王之令弟」と記されている。また、『魏書』卷十九下、章武王太洛伝では、「（章武王彬の）長子融。…融の弟凝。…凝の弟湛。…湛の弟晏」とあり、少なくとも四人兄弟であり、末子以外は子がいたことが記されている。つまり少なくとも二人の兄は妻が存在したことが分かる。6は、妻が宗室の元氏（胡人）、夫が北族八姓⁽²⁶⁾の穆彦（胡人）である。夫は『魏書』には記載がなく、本人墓誌の穆彦墓誌【梶山目録477】では兄弟や妾については記されていない。しかし銘辞に「朝事舅姑、奉接娣姒」とあり、舅姑と娣姒が対句になっており、また妾に奉接することはないため、兄弟の妻と取れる。7は、妻が昌黎の蘭氏（胡人）⁽²⁷⁾、夫が北魏宗室の元彦である。元彦墓誌【梶山目録167】では「樂陵密王之世子、襲封樂陵王」とあり、元茂墓誌【梶山目録329】では「樂陵密王之第三子」とあるので少なくとも二人の弟がいたことが判明する。また『魏書』卷十九下、樂陵王胡兒伝では、「子景略、字世彦（＝元彦）。…景略弟慶略。…子子政。…慶略弟洪略。…洪略弟子業」とあるので、三人の弟がおり、うち一人は子供がいることから妻も存在したことが判明する。さらに序文は「舅姑欽其至

誠、娣姒敬其高軌」とあり、舅姑と娣姒が対句になっているため兄弟の妻と取れる。8は、妻が広平の宋氏（漢人）、夫が宗族十姓（胡人）である。『魏書』に記載がなく、関連墓誌も存在しないため、兄弟の妻や妾の存在は分らない。

以上の検討から、夫の兄弟の妻がいることが確定できた事例が3件あった。序文もしくは銘辞に舅姑と併記される場合が4件あり、その場合は兄弟の妻と取れる表現である。反対に妾の意味と確定できる事例は一つも無かった。

次に正史における用例を検討する。まず、『晋書』卷三一、后妃、左貴嬪伝に、

左貴嬪、名芬。…及元楊皇后崩、芬獻誄曰、「惟泰始十年秋七月丙寅、晉元皇后楊氏崩、嗚呼哀哉。…諸姑姊妹、娣姒媵御。追送塵軌、號咷衢路」。

左貴嬪、名は芬。…元楊皇后の崩ずるに及び、芬、誄を獻じて曰く、「惟れ泰始十年秋七月丙寅、晉の元皇后楊氏崩ず、嗚呼哀しい哉。…諸の姑姉妹、娣姒媵御。塵軌を追送し、衢路に號咷す」と。

とある。西晋の元皇后楊氏に対する誄にて「姑・姉妹・娣姒・媵御」という文脈で使われており、媵御は妾の意味なので、娣姒は夫の兄弟の妻の意味と取れる。なお元皇后の夫は司馬炎（武帝）であり兄弟の妻も存在する。次に、『南齊書』卷二十、皇后、武穆裴皇后伝に、

武穆裴皇后、諱惠昭。…。后少與豫章王妃庾氏爲娣姒、庾氏勤女工、奉事太祖・昭后恭謹不倦、后不能及、故不爲舅姑所重、世祖家好亦薄焉。武穆裴皇后、諱は惠昭。…。后、少くして豫章王妃庾氏と娣姒を爲し、庾氏、女工に勤め、太祖・昭后に奉事して、恭謹にして倦まず、后、及ぶこと能はず、故に舅姑の重んずる所と爲らず、世祖が家、好（むつまじ）くすも亦薄んず。

とある。武穆裴皇后は蕭道成の長子の蕭曠（武帝）の妻、豫章王妃庾氏は蕭道成の次子の蕭嶷の妻なので、娣姒は夫の兄弟の妻の意味と確定できる。庾氏の方が女性のたしなみに優れ、嫁ぎ先の父母によく仕えたので義理の父母に優遇されたことが描写されている。最後に、『魏書』卷五六、鄭義伝に、

瓊兄弟雍睦、其諸娣姒亦咸相親愛、閨門之內有無相通、爲時人所稱美。瓊の兄弟は雍睦、其の諸娣姒も亦、咸な相ひ親愛し、閨門の内、有無相ひ通じ、時人の美と稱（たた）う所と爲る。

とあり、兄弟の妻の意味であり、仲睦まじい関係が描写されている。以上、正史でも兄弟の妻の意味で使われていたことが確認できた。

次に、魏晉南北朝期の石刻史料の用例について検討する。表1-2によれば1件が西晋、4件が北魏以降の北朝墓誌である。1は、「舅姑嘉其淑婉、娣姒宜其德音」とあり、舅姑と娣姒が対句になっているため兄弟の妻と取れる。2は、妻が清河崔氏（漢人）、夫が太山羊氏（漢人）である。『魏書』卷七七、羊深伝および父の羊祉墓誌があり、夫に三人の弟がいることが判明する。さらに銘辞に「孝敬舅姑、竭誠娣姒」とあり、舅姑と娣姒が対句になっているため兄弟の妻と取れる。3は、妻が安定皇甫氏（漢人）、夫が河東薛氏（漢人）である。「昆季（兄弟）少なからず、娣姒實に多し」という表現から、夫の兄弟の妻の意味として確定できる⁽²⁸⁾。4は、妻が隴西董氏（漢人）、夫が太原王氏（漢人）である。墓葬の点では夫婦および妾三人の合葬墓であることから⁽²⁹⁾、夫の妾の意味の可能性もある。しかし銘辞に「移愛娣姒、從敬舅姑」とあり、舅姑と娣姒が対句になっているため兄弟の妻と取れる。5は、妻が太原王氏（漢人）、夫が渤海封氏（漢人）である。『北齊書』卷二一、封隆之伝附子繪に、「子繪弟子繡。…子繡在渤海、（兄女婿の妻）定遠過之、對妻及諸女譙集、言戲微有褻慢、子繡大怒、鳴鼓集眾將攻之」とあり、夫の弟に妻がいたことが判明する。さらに銘辞に「娣姒叔妹（＝夫の妹）」とあり、妾と夫の妹が同格に並べられることは有り得ないことなので、兄弟の妻の意味ととれる。

以上の検討により、正史でも魏晉南北朝期の石刻史料でも大半が兄弟の妻という意味で用いられていることが確認できた。なお先行研究では「北魏や東魏は、家格の高い男性ほど、皇室や外戚などの貴門から妻を娶り、妻の実家が有力で妻の嫉妬が実家からも奨励されているため、上流家庭の夫ほど妾を置くことが難しい」⁽³⁰⁾ことが指摘されている。つまり、北魏では妾を置くことは実態として少なかった。したがって娣姒は嫁ぎ先の夫の兄弟の妻の意味と解釈することが妥当であろう⁽³¹⁾。

（2）四徳

女性の特徴語として最も顕著な例は四徳である。典故は、『周礼』天官・九嬪に、「九嬪掌婦學之灋、以教九御婦德・婦言・婦容・婦功（九嬪は婦人の学すべき規範のことを掌り、九御に婦徳・婦言・婦容・婦功を教える）」とあり、鄭玄注に、「婦徳謂貞順。婦言謂辭令。婦容謂婉婉。婦功謂絲枲

（婦徳とは貞順を言い、婦言とは言葉遣いを言い、婦容とはしとやかさを言い、婦功とは糸麻の仕事を言う）」とある。図のすぐ近くにある六行⁽³²⁾も関連性が深い語であり、表2-1では対句表現としてセットで出てくる場合が多い。また、最も多い四徳と六行の対句以外にも三従・三明など他の数字との組み合わせも見られる。関連する語に三徳・七徳・四教・七教・四行・六行・七行・四礼・五礼・六礼・三善などがある。

表2-1によれば、序文も含めると本稿で扱った全北魏女性墓誌88人中33人（3割以上）が四徳を使用しており、使用頻度が極めて高いことが分かる。うち、銘辞で使われた件数は17件である。漢人だけではなく胡人の女性墓誌でも使用されている。このように女性の使用率が圧倒的に高いが、男性が序文にて四徳を使用した例も2例ある。その場合は当然夫人の徳目という意味ではなく、『大戴礼記』衛將軍文子の、「孔子曰、孝、徳之始也。弟、徳之序也。信、徳之厚也。忠、徳之正也。（曾）參也、中夫四徳者矣哉」を典故とする「孝弟（＝悌）信忠」である。

次に魏晉南北朝期の正史の用例を検討する。表2-2の1は周の後妃制について『周礼』天官・九嬪を引用して述べたものである。2『三国志』裴注引く『魏氏春秋』は東晋の孫盛の手に成る曹魏の出来事が記された書籍である。ここでは婦人の四徳と士人の百行⁽³³⁾がともに遵守すべき美德として併記されている。「婦有四徳、卿有其幾（妻には四徳があるが、そなたはいくつ備わっているか）」という質問に対し「新婦所乏唯容（私に欠けているのは婦容だけです）」と答えているので、鄭玄注の四徳を踏まえていることがわかる。なお『世説新語』賢媛にも同じ内容が記載されている。3は東晋の徐眾による評である。呉の是儀（男性）に対する評価として四徳を用いる。4では六義、6では六行、7では六宮が四徳とセットで使われている。なお6は賛の部分なので『晋書』が成立した唐の太宗期の価値観を示す。4は后妃伝の序文であるため、やはり『晋書』が成立した唐の太宗期の価値観を示す可能性がある。したがって正史において四徳と六～が女性に対してセットで使われる用例は晋代まで遡ることはできず、7の『周書』の用例が初出となる。5は『晋書』に引かれる夏侯湛（243～291年）の作品中に用いられ、孔子の言葉を引用した後に用いられることから『大戴礼記』の用例である。一方、男性に用いられる四徳は、『三国志』の注に引かれる東晋の評および『晋書』に引かれる夏侯湛の作品の2例であり、残る5例は皇后や列女など女性に関する項目にて言及されている。

最後に魏晉南北朝期の碑文の用例を検討する。まず西晋の永寧二（302）年九月二十日「孫松女墓誌」に、「在祿有淑順之美、來嬪盡四德之稱」とある。女性に対する鄭玄注の四徳の用例である。次に、『文選』に収録されている梁の沈約「齊故安陸昭王碑文」に、「公以宗室羽儀、允膺嘉選。協隆三善、仰敷四徳」とあり、南齊の皇族蕭緬に対する称賛として四徳を用いる。また北魏の正光四（523）年十一月六日の「高貞碑（魏故營州刺史侯高君之碑）」に、「仰敷四徳之美、式揚三善之功」とあり、男性に対して四徳が使用されている。

なお女性に対する四徳の使用自体は、『春秋左氏伝』襄公九年に、「今我婦人而與於亂、固在下位、而有不仁、不可謂元。不靖國家、不可謂亨。作而害身、不可謂利。棄位而放、不可謂貞。有四徳者、隨而無咎、我皆無之、豈隨也哉」とあるのが初出である。ここでの四徳は『周易』乾卦の、「君子行此四徳者、故曰乾元亨利貞（君子は此の四徳を行う、故に曰く乾の「元ひに亨りて貞しきに利ろし」と）」の意味である。また前漢の劉向『列女伝』、孽嬖伝、魯宣繆姜にも同じ記載が収録されている。したがって鄭玄注の四徳の用例は西晋「孫松女墓誌」や東晋『魏氏春秋』に記された曹魏の記載から始まるため、魏晉期の用例を北魏墓誌も踏まえていると言えよう。ただし四徳と六行のセットは北魏墓誌になって出現した新しい表現である。また、北周から唐代にかけても使用の継続が確認できた⁽³⁴⁾。

（3）慎終

この語は北魏墓誌において二つの意味で用いられている。第一に「慎終追遠（親を手厚く葬り礼を尽くすこと）」であり、典故は『論語』学而に、「曾子曰、慎終追遠、民徳歸厚矣（親を手厚く葬り祖先をお祭りしていけば人民の徳もそれに感化されて厚くなるだろう）」とあり、何晏集解に、「慎終者、喪盡其哀。追遠者、祭盡其敬」とある。第二に「慎終如始（最初から最後まで慎重に行う）」であり、典故は『老子』第六四章に、「慎終如始、則無敗事（やりはじめと同じく、終わりぎわを慎重にせよ。そうすれば仕事がだめになることはない）」とある。銘辞では前者の意味で2例、後者の意味で2例の用例がある。また、序文に後者の意味で1例ある。

北魏墓誌の慎終の用例について、表3-1の5件を検討する。1は、銘辞の終わりの死の悲しみの部分に該当し、本人に対する葬礼の手厚さを表現している。2は、生家にて慎み深いという本人の資質としての意味で用い

られ、結婚後は宣武帝の媵妾と仲良くしたことが称賛されている。3も同様に、本人の徳行として慎み深いことが称賛されている。4は、幼少時に家人が犯した罪に連座して官婢となり、後宮で昇進を遂げ、亡くなるまで後宮に勤めた人物である。この墓誌は「魏故第一品家監侯夫人之墓誌銘」と題されているが、「夫人」とは後宮の家監という役割を担当した彼女に対する尊称であり、ここでの慎終は本人に対する賛辞として用いられている。5は序文で用いられる。舅姑の後に用いられているので嫁ぎ先の親の葬儀の意味である。

次に碑文の用例として、後漢の漢安二（143）年の「北海相景君碑」に、「〔故〕中部督郵都昌羽忠字定公故門下督盜賊劇騰頌字叔遠。…。（行三年服者凡八十七人）豎建□□、惟故臣吏、慎終追遠、諒闇沈思、守衛墳園、〔仁綱〕禮備、陵成字立、樹列既就、…」とある。これは上司が亡くなったため故吏が石碑を建立したものである。親の服喪に匹敵する三年服喪をしていることから「慎終追遠」の表現を使ったと考えられる。

正史の用例について、表3-2の4件を検討する。1は本人（皇帝の妻）に対する葬礼を指す。2は本人（功臣）に対する葬礼を指す。3は北魏皇帝が最初から最後まで慎重に行った徳を称えている。4は一般論として臣が君に対して、子が親に対して手厚く葬り礼を尽くすことを指す。

最後に『文選』の用例として、西晋の潘岳「西征賦」に、「觀夫漢高之興也、…。乃實慎終追舊、篤誠款愛（かの漢の高祖が成功した原因を考えてみると、…。実は人々を最後まで面倒を見、古なじみを捨てず、誠実であって慈愛に満ちていた）」とあり、ここでの慎終は漢の高祖の人柄として使われており、『論語』を典故とする一つ目の意味とは用法が異なる⁽³⁵⁾。また、西晋の潘岳「楊仲武誄」では、「潘楊之穆、有自來矣。矧乃今日、慎終如始（潘家と楊家の親密なことはずっと以前からのことであるが、いわんや今日の私と君との交わりは両家の交流のはじまりのように睦まじかった）」とあり、二つ目の意味が用いられている。

以上の検討から、慎終という語は北魏女性墓誌では本人の慎み深さという特質、および親を手厚く葬る行為として用いられていた。正史や『文選』の用例からすると男性にも使われる場合もあったが、北魏墓誌では女性特有の表現となっていたことが指摘できよう。

(4) 窈窕

この語の意味は女性の美しい容貌であり、典故は『詩経』周南・関雎に、「窈窕淑女、君子好逑（たおやかなる良き乙女は君子の良き連れ合い）」である。また、毛伝に「幽閒也」とあり、女性の神秘的な美貌を褒める語として用いられる。

北魏墓誌の窈窕の用例について、表4-1の17件を検討する。銘辞が10件、序文が7件である。北魏墓誌で初出の1は『詩経』の八文字をそのまま用いる。その後、窈窕の語の後に男性に嫁ぐ「作嬪君子」などの表現を繋げる『詩経』を踏まえた用語が、銘辞では6・10、序文では7・14・17で使われている。特に14と17はほぼ同じ表現である。また、15のみ宗室男性が墓景を表現する部分において墓門の深遠さの意味で用いるが、残りは全て女性が本人の資質として美しい容貌という意味で用いる。なお、その後の北朝墓誌を調べると全て女性の用例となるので、15の男性の用例のみが北朝を通して特異なケースとなっている。1の出身不明者を除き銘辞はすべて漢人であるが、序文は3・13が不明、7・16・17が胡人である。

次に石刻史料の用例を確認する。まず後漢の「楊卿耿伯墓記」に、「故縣侯守丞楊卿耿伯、質性清潔、丁時窈窕、才量休赫」とあり、【漢魏六朝WEB】の注は美好と解釈する。これは男性地方官の墓記であることから、成人男性として容貌が美しいことを示す。次に後漢の光和四（181）年四月二日「三公山碑」に、「山谷窈窕、石巖巖兮」とあり、【漢魏六朝WEB】の注は深遠と解釈する。つまり15と同様に景色の深遠さとしての用例である。次に西晋の永寧二（302）年九月二十日「孫松女墓誌」に、「姿窈窕之容、體賢明之行」とあり、女性の美貌の意味である。

最後に『文選』の用例を確認すると、後漢の班固「西都賦」は、「後宮之號十有四位。窈窕繁華、更盛迭貴（後宮の女性の称号に14の位の別がある。しとやかな美女もあり、花盛りの美女もあり、互いに栄達し、高貴な身となる）」という女性の美貌の意味で用いる。次に、東晋の郭璞「江賦」は、「爰有包山洞庭、巴陵地道。潛達傍通、幽岫窈窕」とあり、景色の深遠さの意味で用いる。

以上、後漢～東晋にかけては男性および女性の美貌および景色の深遠さの様々な用例が見られたが、北魏～北朝墓誌では女性墓誌が美しい容貌の意味で用いる場合がほとんどを占めていたことが確認できた。また北魏墓

誌では、はじめは『詩経』の典故をそのまま用いたが、時代が下ると表現に変化を加え、文学的レトリックともいえる変遷がみられた。

（5）淑媛

この語の意味は、善良で美しい女性であり、用例は『後漢書』列女伝、曹世叔妻に、「若淑媛謙順之人、則能依義以篤好、崇恩以結援」とあり、李賢注に、「淑、善也。美女曰媛（淑は善である。美女は媛という）」とある。また『芸文類聚』に収録された後漢の王逸「機婦賦」に、「窈窕淑媛、美色貞怡」とあり、これは（4）にて扱った『詩経』の「窈窕淑女」を踏まえた表現である。淑女は性質が善であることしか表現できないが、淑媛とすることで容姿の美しさが加わっている。

北魏墓誌の淑媛の用例について、表5-1の4件を検討する。すべて女性墓誌であり、淑女の意味として用いられる。内訳は宗室（胡人）が1人、残る3人は漢人である。淑媛については、『魏書』卷九二、列女、封卓妻劉氏に、

中書令高允念其義高而名不著、爲之詩曰、「…。實有華宗、挺生淑媛。…」。

中書令高允、其の義高くして名著らかならざるを念じ、之が爲に詩して曰く、「…。實に華宗有り、挺きんでて淑媛を生む。…」と。

とあり、漢人名族の高允（390～487年）が女性を讃えるため詩作した漢詩で使われている。実は「挺生淑媛」という表現はこれまで用例が無く、高允が最初に用いた表現である。したがって1の「篤生淑媛」という表現は高允の影響とも考えられる。ただし北魏男性墓誌には「挺生哲人」という表現があることから、男性の言い回しが女性に応用された可能性もある。

次に石刻史料の用例を確認する。西晋の永嘉元（307）年四月十九日「王浚妻華芳墓誌」の銘辞に「於穆淑媛、體純德茂」とあり、美しい女性の意味である。

最後に『文選』の用例として、曹魏の曹植「与楊徳祖書」に、「蓋有南威之容、乃可以論於淑媛（思うに春秋時代晋の美女の南威のような容姿があつてはじめて淑女と評することができるだろう）」とあり、女性の美しい容姿が強調されている。

なお類似する語に「淑女」（女性2例、男性0例）と「淑人」（女性1例、男性0例）がある。用例と年齢の関係をみると、淑媛は38歳・26歳・20歳、淑女は25歳、淑人は65歳であり、淑人は使い分けられている可能性があるが、

淑媛と淑女はあまり使い分けがないと考えられる。

(6) 蘭蕙

この語の典故は『楚辞』九歎、「懷蘭蕙與衡芷兮、行中野而散之」であり、「蘭」「蕙」を人間の美質として喩える。漢代以降はこの語の意味は二つに分かれる。第一には香草であり、『漢書』楊雄伝、甘泉賦（『文選』にも収録）に、「排玉戸而颺金鋪兮、發蘭蕙與穹窮（風は玉戸をおし開いて金の鋪首を揚げ、めぐって蘭蕙と穹窮という香草の芳香を奮発する）」とあり、師古注に、「…、發奮衆芳」とある。また、『漢書』卷五七上、司馬相如伝、子虚賦（『文選』にも収録）に、「於是鄭女・曼姬、…。下摩蘭蕙、上拂羽蓋（夏姬と鄧曼という美女は、…。下は蘭と蕙という香草を擦り、上は輿の屋根を緑の羽で覆ったものを払う）」という用例がある。第二に賢者の喩えであり、『後漢書』卷八十下、文苑列伝下、趙壹伝、刺世疾邪賦に、「被褐懷金玉、蘭蕙化爲芻。賢者雖獨悟、所困在群愚（褐を被って金玉を懷き、蘭蕙は化して芻となる。賢者は独り悟るけれど、愚かな人々の困惑するところとなる）」とあり、優れた男性を称える用例である。

北魏墓誌の蘭蕙の用例について、表6の7件を検討する⁽³⁶⁾。1～4の用例では女性の美しい容貌という新しい使い方が出てきている。先ほど挙げた『漢書』子虚賦の用例は、主語は美女ではあるが、蘭蕙は香草しか意味していない。北魏墓誌ではこの賦を下敷きにして蘭蕙が直接女性の美しさを示す用法が生まれた可能性が考えられる。なお2と3は疊語を二回繰り返した後、「陵霜吐馥、冬華表新」「臨霜吐馥、冬年表香」と一部文字を入れ替えただけであり、表現の類似性が高い。4も疊語の後に蘭蕙を用いている。この類似性は3人がいずれも宮女であることとも関連するかもしれないが、撰文者が同じであったことによる可能性もある⁽³⁷⁾。5は男性墓誌であり、賢者を指す。6・7は男性墓誌の序文であり、『後漢書』の金玉・蘭蕙の組み合わせではあるが、6は容姿の美しさを示す。

次に『文選』の用例として、西晋の潘岳「為賈謐作贈陸機」に、「如彼蘭蕙、載採其芳（香り高い蘭や蕙のように香しいその人（陸機）を取り立てた）」とあり、二つ目の意味の賢者を指す。

以上の検討から、蘭蕙という語は漢魏晋では優れた男性を称える用例であったものが、北魏女性墓誌の銘辞では美しい女性の容姿という新たな用法が出てきたことが確認できた。そして北魏男性墓誌の序文でも美しい容

貌という新しい表現が生まれていた。

（1）～（6）のまとめと確認

ここまで検討した六語の北魏女性墓誌の特徴語を確認する。（1）は姑舅を伴う場合が多く、嫁ぎ先での円滑な人間関係が期待されていたことが読み取れた。（2）は女性の徳目であり、四徳と六～をセットで使う用例が北魏女性墓誌では多用されていた。（3）は女性本人の慎み深さ、（4）と（6）は女性の美しい容貌、（5）は美しさと善良であることが賞賛の対象となっていた。なお（4）は『詩経』の典故を踏まえ美貌により嫁いだという表現が多数みられたことから、作嬪を意識させる表現と言える。なお図によれば、作嬪・母儀・婦徳・夫人の四語も北魏女性墓誌の特徴語である。今回は言葉の意味や用例が時代によって変化したり男性墓誌にも使われたりする多義的な語を取り上げたためこれら四語を検討しなかったが、すべて婚姻関係を前提とする嫁ぎ先での女性の立場を表す語であることを指摘しておきたい。

おわりに

本稿では北魏女性墓誌の銘辞に対してテキストマイニングを行い、「四徳」「六行」「夫人」「作嬪」「母儀」「娣姒」「慎終」「婦徳」「淑媛」「蘭蕙」「四行」「四教」「窈窕」「有行」の14語が女性墓誌の特徴語として得られた。そこから得られた特徴語のうち複数の語義を持つものについて用例を検討した。その結果、従来指摘されているとおり、婦徳といった儒教倫理および本人の美貌（外見）や慎み（性格）に偏っていることが確認されたが、一方、従来指摘されている才学については確認されなかった。この原因については更なる検討を要する。また（2）四徳と六～のセット表現や（6）蘭蕙の新しい用例が北魏墓誌において生まれた結果を踏まえると、北魏墓誌は魏晉南朝の用例をそのまま踏襲していたのではないことが分かった⁽³⁸⁾。つまり北魏墓誌の撰文者は典故や魏晉南朝の用例を踏まえつつも北魏で新しい表現を生み出していたのであり、取捨選択をした上で北魏墓誌におけるジェンダーロールの描写がなされたと考えられる。ではこの結果が北魏史においていかなる意味を持つのか、おわりに歴史的位置づけと展望を述べたい。

北魏では洛陽遷都後に銘辞を持つ墓誌が突然出現し、一般化する。それまで墓誌銘を作らなかった鮮卑族が突然作りはじめ、特に宗室のほとんどが墓誌を持つようになることから、北魏政権の積極的な指導のもと墓誌情報が一斉に共有された可能性が指摘されている⁽³⁹⁾。その嚆矢として太和十九(495)年に孝文帝自らが撰文した馮熙墓誌が作成され⁽⁴⁰⁾、モデルとして影響力を持ったことが想定されている⁽⁴¹⁾。また、孝文帝が墓誌文化を受容したのは南朝からの亡命貴族である王肅の影響があった可能性も指摘されている⁽⁴²⁾。本稿の結果を併せて考えるならば、洛陽遷都後の北魏女性墓誌の内容は、南朝の漢文化を元に、北魏王朝側が理想とした婦徳という儒教倫理を備えた女性を描写した可能性が考えられよう。なお北魏胡人女性については、当時の顕著な特徴である尚武、つまり従軍し、軍を指揮する姿⁽⁴³⁾が北魏墓誌では描かれていない。この点については、各テキストが書かれた目的や想定する読者層を踏まえ検討し、それぞれが独自の言説(discourse)を形成していることを明らかにすることが問題解決の糸口となると考えている。この点については稿を改めて論じたい。

なお本稿では北魏女性墓誌に限って検討したが、北魏男性墓誌については稿を改め検討し⁽⁴⁴⁾、男女合わせた総合的比較研究を行う予定である。その上で、北魏の「ジェンダーステレオタイプがどのようにして構築され正当化されるのかという過程」⁽⁴⁵⁾についても論じたい。

註

- (1) 例えば、『ジェンダーの中国史』(勉誠出版、2015年)、『中国ジェンダー史研究入門』(京都大学学術出版会、2018年。以下【小浜 2018】と称す)、『東アジアの家族とセクシュアリティ——規範と逸脱』(京都大学学術出版会、2022年。以下【小浜 2022】と称す)などがあげられる。
- (2) 下倉渉「先秦～隋唐 古典中国 父系社会の形成 はじめに」【小浜 2018】。
- (3) 左古輝人編『テキスト計量の最前線——データ時代の社会知を拓く』(ひつじ書房、2021年) 8～9頁。
- (4) 計読とは文章の中で特定の語句がどれほど出現し、どれほど共起するかを量的に計測することにより、有意義な知識を得ようとする諸技法の総称である。具体的には、テキストマイニング・テキストアナリティクス・計量テキスト分析・遠読などがある。

- (5) 質的研究に対する批判については樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析——内容分析の継承と発展を目指して——第2版』（ナカニシヤ出版、2020年。以下【樋口 2020】と称す）5～8頁参照。なおこれは質的研究を否定するものではなく、前段階で計量的分析手法を用いることが望ましいという立場である。
- (6) 馬立軍『北朝墓誌文体与北朝文化』（中国社会科学出版社、2015年。以下【馬 2015】と称す）、張鴻『北朝石刻文献的文学研究』（中国社会科学出版社、2015年）、魏宏利『北朝碑誌文研究』（中国社会科学出版社、2016年）などが代表的な研究である。
- (7) 黄薈『北朝女性墓誌研究』（福建師範大学修士論文、2007年）。
- (8) 羅新『漫長的余生：一個北魏宮女和她的時代』（北京日報出版社、2022年）。
- (9) 【馬 2015】237頁。
- (10) 【樋口 2020】5頁でも計量分析を用いていない研究の一般的な問題点として指摘されている。
- (11) 梶山智史『北朝隋代墓誌所在総合目録』（汲古書院、2013年。以下【梶山目録】と称す）。同書を用いて墓誌の所在を示す場合【梶山目録＋墓誌番号】と記す。
- (12) 大知聖子「新出北魏墓誌目録」（『名古屋大学東洋史研究報告』47号、2023年。以下【大知 2023】と称す）。
- (13) 窪添慶文「墓誌の起源とその定型化」（『立正史学』105号、2009年原載、同『墓誌を用いた北魏史研究』、汲古書院、2017年（以下【窪添 2017】と称す）再収）。
- (14) 本稿で用いた具体的な手法については大知聖子「テキストマイニングによる北魏墓誌の銘辞の分析——KH Coderを用いた古典中国語（漢文）の数量的研究——」（『名城大学総合研究所紀要』27号、2022年）参照。
- (15) KH Coderは樋口耕一氏の開発した計量テキスト分析またはテキストマイニングのためのソフトウェア。詳細は【樋口 2020】参照。
- (16) 大知聖子「北魏墓誌の銘辞とその撰文——同一銘辞の問題を中心に——」（『名古屋大学東洋史研究報告』45号、2021年。以下【大知 2021】と称す）の発表後、北魏墓誌の数を増やしたが、割合としては変化がなかった。今後新出土墓誌が増加してもこの割合になると考えられる。事例を増やした具体的な北魏墓誌については【大知 2023】参照。
- (17) ただし、中には例外として、ほぼ100%の語が別の墓誌と重複する事例もある。これは【大知 2021】で明らかにしたように、同一作者による銘辞の使い回しに由来するものと考えられる。
- (18) 【窪添 2017】第三章「北魏墓誌中の銘辞」参照。
- (19) 同一作者による文章の再利用が疑われる極めて高い類似性のクラスターの具体

例については【大知 2021】参照。

- (20) 大知聖子「中國哲學書電子化計劃の分析ツールを用いた北魏墓誌研究——類似性のネットワーク図とワードクラウドを中心に——」(『名城大学総合研究所紀要』28号、2023年)。
- (21) 対応分析は社会学等の分野で一般的に用いられている分析方法である。計算方法については藤本一男「対応分析は〈関係〉をどのように表現するのか——CA/MCAの基本特性と分析フレームワークとしてのGDA」(『津田塾大学紀要』52号、2020年) 169～184頁参照。
- (22) 洛陽遷都前の墓誌【梶山目録1～26】は殆どが銘辞を伴わず、出土地も平城(山西省大同)付近が中心となるため予め除外した。洛陽遷都後の【梶山目録27～556】のうち、実は同一である墓誌(寧陵公主墓誌【梶山目録101】と元君墓誌【梶山目録102】、および呂通墓誌【梶山目録310】と呂達墓誌【梶山目録315】)は1件として扱った。何俊芳「新見五方偽刻北魏墓志弁釈」(『許昌学院学報』2016年1期)により偽刻の指摘がある郭顥墓誌【梶山目録261】および銘辞を伴わない墓誌は除外した。また同一墓誌に夫婦別々の銘辞が刻まれた場合は各男女1件の事例とし(張問墓誌銘【梶山目録338】および賀牧墓誌【大知2023】)、それ以外の男女合葬墓誌は除外した。さらに【大知2023】により銘辞を伴う墓誌の事例を53件増やした。また楊珍墓誌(何碧琪主編『北山汲古——碑帖銘刻拓本』、香港中文大学文物館、2015年)を男性墓誌として追加したのである。
- (23) 毛遠明『漢魏六朝碑刻校注』(線装書局、2008年)の増補版データベース。以下、【漢魏六朝 WEB】と称す。詳細は大知聖子「中国・石刻史料のデータベース紹介」(『人文情報学月報』107号、2020年)参照。
- (24) 『北朝胡姓考』外篇第四「高車諸姓」は定州鮮于氏を高車族とし、正史に見える漢唐間の鮮于氏を列挙する中で漁陽の鮮于靈馥(『魏書』卷八四、儒林、李業興伝)を挙げる。
- (25) 丘哲墓誌【梶山目録475】では祖父を「鎮西大將軍・都督定州諸軍事・定州刺史・臨淮公・庫堆」とするが、『魏書』卷三十、丘堆伝では「丘堆、代人也、…。祖即位、進爵臨淮公、加鎮西將軍。徙為太僕」とあり、丘堆と記されている。
- (26) 孝文帝の姓族詳定により胡族において最高とされた八つの一族であり、具体的には穆・陸・賀・劉・樓・于・嵇・尉氏が該当する。
- (27) 『北朝胡姓考』内篇第四「四方諸姓」は蘭氏を「北方烏洛蘭氏、後改爲蘭氏」とする。
- (28) 【漢魏六朝 WEB】の注は「『魏書』卷薛安都傳附眞度傳、載其子有嫡子懷徹、庶長子懷吉以及懷直、懷朴、懷景、懷儁、故傳稱“眞度諸子既多、其母非一”、與

墓誌所記相合」とする。

- (29) 『新出魏晉南北朝墓誌疏証（修訂本）』（中華書局、2016年）245頁。
- (30) 板橋暁子「魏晉南北朝時代の「以妾為妻」「以妻為妾」について」【小浜 2022】、315頁。また苗霖霖「鮮卑婦女社会地位考察」（『北朝研究』12輯、2020年）は、鮮卑族の高貴な身分の女性が家庭および社会的に地位が高い点を後漢から北魏にかけて検証し、北魏が一妻のみで妾を置かないのはこのような女性に地位の高さが背景にあると指摘する。
- (31) なお、「嬖」を含む句は他に単明暉妻賈氏墓誌【梶山目録283】の「音纂大嬖」、宇文永妻韓氏墓誌【梶山目録194】の「載姬模嬖」、高猛墓誌【梶山目録288】の「譬嬖歸周」があるが、いずれも賢母の代名詞として用いられる周文王の妃の太嬖のことであり、娣嬖とは無関係である。
- (32) 六行は『周礼』地官・大司徒に、「孝、友、睦、婣、任、恤」とあり、一般的に男性に対する徳目として使用される。【漢魏六朝 WEB】の注および【馬 2015】229頁は女性の六行も同様の意味と取る。
- (33) 『詩経』衛風・氓に、「士之耽兮、猶可説也。女之耽兮、不可説也（男の淫らはまだ救えるが、女の淫らは取り返しがつかない）」とあり、鄭玄の箋に、「士有百行、可以功過相除」とある。
- (34) 楊柳「多民族文化背景中的北朝女性墓志書写」（『湖北民族学院学报：哲学社会科学版』2018年第4期）は四徳六行の事例を列举し、「据此可知、北朝女性、特别是上層女性、对《詩經》本身并不陌生、她們自覺遵奉《毛詩序》所謂“后妃之徳”、并以之為范」とする。
- (35) 新釈漢文大系『文選（賦篇）』（明治書院、1990年）197頁参照。
- (36) なお蘭および蕙を含む語はこの他にも多数の用例がある。
- (37) 【大知 2021】にて既に指摘したが、生前の出身や官職が極めて類似する人物同士であっても銘辞の熟語は一つも同一表現が無い場合がほとんどである。したがって銘辞の類似性が高い場合は同じ撰文者であった可能性が高い。
- (38) 【窪添 2017】45頁も、劉宋・南齊における家系や家族に関する過剰なほどの記述が北魏墓誌では淡泊であるという特徴から、南朝墓誌がそのまま北魏で再生産されたわけではないとする。
- (39) 窪添慶文「墓誌の起源とその定型化」（『立正史学』105号、2009年原載、【窪添 2017】再収）。
- (40) 有名な記載であるが、『魏書』卷八三上、外戚上、馮熙伝に、「柩至洛七里澗、高祖服衰往迎、叩靈悲慟而拜焉。葬日、送臨墓所、親作誌銘」とある。
- (41) 窪添慶文「長樂馮氏に関する諸問題」（『立正史学』111号、2012年原載、【窪添

2017】再収)。

- (42) 梶山智史「北魏における墓誌銘の出現」(『駿台史学』157号、2016年)および徐冲「馮熙墓誌与北魏後期墓誌文化的創生」(『唐研究』23輯、2017年)。
- (43) 具体的事例については徐海晶「北朝婦女尚武、從軍精神及対唐朝の影響」(『白城師範学院学报』2011年1期)参照。
- (44) 大知聖子「北魏男性墓誌の銘辞にみられるジェンダー規範の研究」(日本ジェンダー学会第27回大会、2023年9月2日)に口頭発表を行っている。2024年3月に論文が発行される予定である。
- (45) ジョーン・W・スコット『ジェンダーと歴史学』(平凡社、1992年。増補新版、2004年。30周年版、2022年、原書2018年改訂版に基づき増補改訂)。

【付記】

本研究は、日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究(課題番号20K13209)および基盤研究(C)(課題番号20K01017 代表:小林聡)の援助を受けて行われたものである。

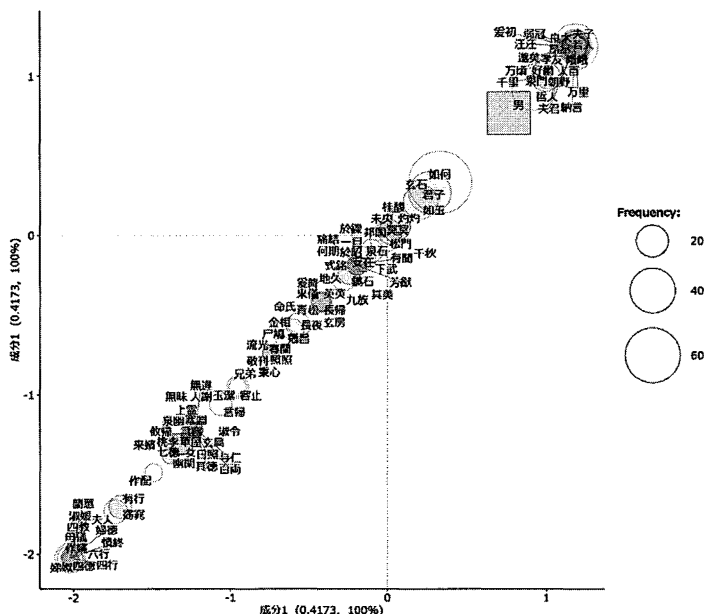


図 北魏墓誌の銘辞の男女別対応分析

表1-1 北魏墓誌の「娣姒」の用例

1. 司馬景和妻孟敬訓墓誌（清河孟氏） 延昌三（514）年1月12日
奉舅姑以恭孝興名、接娣姒以謙慈作稱。…又夫人性寡嫗嫉、多於容納。
2. 李叔胤妻崔寶媛墓誌（博陵崔氏） 神龜二（519）年4月12日
逮事王姑封氏、肅恭婦道、…同室娣姒、班列于三。
3. 元氏夫人趙光墓誌銘（南陽趙氏） 正光元（520）年10月21日
故令衆姒頌徽、群娣歌美、訓範兩宗、惠流庶族。／「上虔舅姑、傍協娣姒」
4. 丘哲妻鮮于仲兒墓誌（漁陽鮮于氏・胡人） 孝昌二（526）年8月18日
「道穆群宗、德矛娣姒。外協親家、內和諸子」
5. 元湛妻薛慧命墓誌銘（河東薛氏） 武泰元（528）年2月17日
敬上接下、娣姒貴其仁。尊佛尽妙、禪練尚其極。
6. 穆彥妻元洛神墓誌（宗室） 建義元（528）年4月18日
及其虔順舅姑、撫遺接幼、居室弼諧、閨房悅睦。／「朝事舅姑、奉接娣姒」
7. 元彥（字景略）夫人蘭將墓誌銘（昌黎蘭氏） 永安元（528）年11月20日
是以舅姑欽其至誠、娣姒敬其高軌。
8. 長孫士亮妻宋靈妃墓誌（広平宋氏） 永熙二（533）年1月30日
尽恭孝舅姑、竭信順於叔妹。子侄被慈惠之恩、室家顯終身之敬。／「姻婭嗟讚、娣姒遵欽」

注：印無しは序文での用例、「」付きの四字句は銘辭での用例を示す。全ての表に共通する。

表1-2 魏晉南北朝石刻史料の「娣姒」の用例

1. 孫氏碑（濟南孫氏） 西晉泰始八（272）年12月15日
舅姑嘉其淑婉、娣姒宜其德音。
2. 羊深妻崔元容墓誌（清河崔氏） 東魏武定二（544）年11月29日
孝敬舅姑、竭誠娣姒、饁粥菜蔬、溫恭朝夕。
3. 薛懷儁妻皇甫懿墓誌（安定皇甫氏） 北齊天統四（567）年12月23日
「昆季不少、娣姒實多」
4. 王士良妻董榮暉墓誌（隴西董氏） 北周保定五（565）年11月5日葬
年一十四、歸於王氏。移愛娣姒、從敬舅姑。
5. 封子繪妻王楚英墓誌（太原王氏） 隋開皇三（583）年2月15日合葬
夫人婦德內彰、母儀外朗。…娣姒叔妹、咸慕指南。彤管嬪嬙、皆仰茂則。

表 2-1 北魏墓誌の「四德」の用例

1. 任城王妃李氏墓誌（趙郡李氏）	「出妃我后、四德斯諧」
2. 元願平夫人王氏墓誌（樂浪王氏）	「六行獨悟、四德孤閑」
3. 元顯妃李元姜墓誌銘（頓丘李氏）	「四德宣揚、六行允塞」
4. 元恪夫人王晉賢墓誌銘（琅耶王氏）	五教聿昭、四德孔緒
5. 元鸞妻王夫人墓誌（琅耶王氏）	□□愍識冲固、四德連瓊
6. 司馬昞妻孟敬訓墓誌銘（清河孟氏）	四德孔脩、婦宜純備
7. 顯祖嬪成氏墓誌（代郡・胡人）	君弱齡播聲、四德昭著
8. 元諡妃馮会墓誌銘（長樂馮氏）	婉婉既閑、敏斯四德／「挺茲窈窕、四德來依」
9. 元新成妃李氏墓誌（頓丘李氏）	五禮既融、四德兼朗
10. 鄧義夫人李渠蘭墓誌（勃海李氏）	自來儀君子、四德淵茂／「三從無爽、四德有歸」
11. 元騰暨妻程法珠墓誌（広平程氏）	「蘋蘩以潔、四德以勲」
12. 元氏夫人趙光墓誌銘（南陽趙氏）	其在重闔、四德唯婉
13. 宣武帝嬪司馬顯姿墓誌銘（河内司馬氏）	閑淑發於髫年、四德成於笄歲
14. 馮邕妻元氏墓誌（胡人）	秉四德以基厥身、執貞高而爲行本
15. 元誘夫人薛氏墓誌銘（河東薛氏）	「一聞無昧、四德孔彰」
16. 伏氏妻魯双仁墓誌銘（濟南魯氏・胡人）	「展轉四德、徘徊六行」
17. 胡明相墓誌銘（安定胡氏）	「四德聿脩、六行光備」
18. 元鑑妃吐谷渾氏墓誌銘（胡人）	「六行外顯、四德內彰」
19. 元彥（字景略）夫人蘭將墓誌銘（昌黎蘭氏）	夫人、幼懷四德、聲實兩著
20. 元端夫人馮氏墓誌（長樂馮氏）	閨中有婉婉之稱、閨外聞四德之聲
21. 楊無醜墓誌（弘農楊氏）	体兼四德、智洞三明／「行該四德、志達三明」
22. 高猛妻元瑛墓誌（胡人）	六行允備、四德無違／詔曰、高氏姑長樂長公主、四德早徽
23. 宇文永妻韓氏墓誌（昌黎韓氏）	「四德獨峻、六行孤深」
24. 李暉儀墓誌（隴西李氏）	身包六行、体兼四德
25. 高樹生夫人韓太妃墓誌（昌黎韓氏）	爲基四德、備舉六行
26. 楊婉嬰墓誌（弘農楊氏）	「有聞六行、無違四德」
27. 李叔胤妻崔寶媛墓誌（博陵崔氏）	「四德無爽、六行靡違」

28. 李翼夫人崔徽華墓誌（博陵崔氏）	「四德有馥、六行收芳」
29. 李仲胤妻邢氏墓誌（河間邢氏）	「婉婉四德、肅雍六行」
30. 江文遥母吳夫人墓誌（不明）	「靖恭四德、優遊六行」
31. 李彌妻古鄭氏墓誌銘（不明）	「四德具羸、六行兼晰」
32. 薛真度妻孫羅穀墓誌（揚州吳郡）	七行能脩、四德必舉
33. 房文姬墓誌（清河房氏）	及登斧醺、四德光被
男性1. 元毓墓誌銘（宗室）	四德靡違、六行斯具
男性2. 元繼墓誌銘（宗室）	具總衆美、詳兼四德

注：□は判読不能文字を示す。全ての表に共通する。

表2-2 魏晉南北朝期の正史の「四德」の用例

1. 『後漢書』卷十、皇后紀
夏、殷以上、后妃之制、其文略矣。周禮王者立后、參夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御、以備內職焉。后正位宮闈、同體天王。夫人坐論婦禮、九嬪掌教四德。
2. 『三国志』魏書九、夏侯玄伝、裴注引く『魏氏春秋』
（許）允顧謂婦曰、「婦有四德、卿有其幾。」婦曰、「新婦所乏唯容。士有百行、君有其幾」。許曰、「皆備」。婦曰、「士有百行、以德爲首、君好色不好德、何謂皆備」。允有慚色。
3. 『三国志』吳書十七、是儀伝、裴注引く徐眾『三国評』
徐眾評曰、「是儀以羈旅異方、客仕吳朝、…資此四德、加之以文敏…」。
4. 『晋書』卷三一、后妃上
若乃娉納有方、防閑有禮、肅尊儀而脩四德、體柔範而弘六義。
5. 『晋書』卷五五、夏侯湛伝
累年不調、乃作抵疑以自廣。其辭曰「…夏侯子曰、「吾聞先大夫孔聖之言『德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也』。四德具而名位不至者、非吾任也」。
6. 『晋書』卷九六、烈女、涼武昭王李玄盛后尹氏
贊曰、從容陰禮、婉婉柔則。載循六行、爰昭四德。操潔風霜、譽流邦國。
7. 『周書』卷九、皇后、宣帝朱皇后
大象元年、立爲天元帝后、尋改爲天皇后。二年、又改爲天大皇后。冊曰、「咨爾彌宣四德、訓範六宮、軒庭列序、堯門表慶、嘉稱既降、盛典宜膺」。

表3-1 北魏墓誌の「慎終」の用例

1. 元鐸妃李媛華墓誌（隴西李氏、李沖の娘） 正光五（524）年8月6日
妃既善母儀、兼閑婦德、三從有間、四教無違。／ 「周附于畢、任合自魯。追遠慎終、千齡載睹」
2. 元恪（宣武帝）嬪李氏墓誌（趙郡李氏） 孝昌二（526）年8月6日
爰在父母之家、躬行節儉之約。…遂應帝命、作配皇家。執虔烝祀、中饋斯允。事先帝以成、奉姑后以義。／「爰在家庭、慎終若始。作配皇家、惠及賸矣」
3. 高猛妻元瑛墓誌（長樂長公主・宗室） 孝昌二（526）年3月7日
「亦既有行、來儀君子。居滿不溢、慎終如始」。
4. 緱光姬墓誌（齊郡緱氏） 正光六（525）年2月21日
「一離家難、長秘宮庭、徘徊禁闥、惆悵幽響。眷言陟謁、歎歎增零。慎終揚美、追遠載聲」
5. 畢明暉妻賈氏墓誌（不明） 正光四（523）年5月3日
恪勲舅姑、雅密肅雍之德。慎終追遠、供姜莫匹。

表3-2 魏晉南北朝期の正史の「慎終」の用例

1. 『晋書』卷三一、后妃上、武元楊皇后伝
泰始十年、崩於明光殿、絶于帝膝、時年三十七。詔曰「…賜諡母趙氏爲縣君、以繼母段氏爲鄉君。傳不云乎、『慎終追遠、民德歸厚』。且使亡者有知、尚或嘉之」。
2. 『晋書』卷三九、王沈伝
泰始二年、薨。…詔曰「夫表揚往行、所以崇賢垂訓、慎終紀遠、厚德興教也。…」。
3. 『魏書』卷二三、衛操伝
桓帝崩後、操立碑於大邗城南、以頌功德、云…（桓穆）二帝到鎮、「言若合符。引接款密、信義不渝。會盟汾東、銘篆丹書。永世奉承、慎終如初。…」。
4. 『魏書』卷七八、張普恵伝
乃密表曰、「臣聞優名實位、王者之所光錫。尊君愛親、臣子所以慎終」。

表4 北魏墓誌の「窈窕」の用例

1. 姜太妃墓誌頌（不明） 正始元（504）年11月18日 「窈窕淑女、君子好逑」
2. 元継夫人石婉墓誌銘（渤海石氏） 永平元（508）年11月23日 「夫人窈窕、性實稟常、心如懷月、言似吐璋」
3. 冠軍將軍夫人劉氏墓誌（不明） 延昌元（512）年3月25日 窈窕之容、淑善其身
4. 元颺妻王夫人墓誌（琅邪王氏？） 延昌二（513）年12月4日 「如何不弔、高松早折、奄同周南、窈窕永逝」
5. 元諡妃馮會墓誌銘（長樂馮氏） 熙平元年（516）8月2日 「河岳吐靈、爰育芳微、挺茲窈窕、四德來依」
6. 元新成妃李氏墓誌（頓丘李氏） 熙平二年（517）11月28日 「雲姿窈窕、容禮堂堂、於穆仁妃、作配君王」
7. 元妙墓誌（宗室） 神龜二（519）年10月 故窈窕著聞、令播遐爾。季十有七、嫡龍驤將軍遵之長子。
8. 宣武帝嬪司馬顯姿墓誌銘（河内司馬氏） 正光二（521）年2月22日 夫人承聯華之妙氣、育窈窕之靈姿。
9. 馮迎男墓誌（西河馮氏） 正光二（521）年3月18日 窈窕七德、長而彌甚。／「棄斯窈窕、忽歸堙松、如可順子、不遂心匈」
10. 張君妻李淑真墓誌（趙郡李氏） 正光二年（521）7月3日 「淑女窈窕、作嬪君子」
11. 盧令媛墓誌銘（范陽盧氏） 正光三年（522）4月16日 「脩姱窈窕、玉瑩金相」
12. 元譚夫人司馬氏誌銘（河内司馬氏） 正光四年（523）3月23日 「婉彼清閨、誕茲淑令、窈窕言容、優柔工行」
13. 單明暉妻賈氏墓誌（不明） 正光四（523）年5月3日 窈窕口莫、無私謁之心。
14. 宣武帝嬪李氏墓誌（趙郡李氏） 孝昌二（526）年8月6日 是以灌木之音遙聞、窈窕之響彌遠。遂應帝命、作配皇家。
15. 元俊墓誌銘（宗室男性） 建義元年（528）7月12日 「墳路荒芒、泉門窈窕、空願與歸、徒嗟絕倒」
16. 邢巒夫人元純施（陀）墓誌銘（宗室） 永安二（529）年11月7日 岐嶷發自韶年、窈窕傳於卅日。
17. 元懿妻陸夫人孟暉墓誌銘（北族八姓） 永安三（530）年2月15日 於是灌木之音遠聞、窈窕之響彌著。遂應父命、作配皇枝。

表5 北魏墓誌の「淑媛」の用例

1. 鄧羨夫人李渠蘭墓誌（勃海李氏） 神龜元（518）年12月9日
「篤生淑媛、秉心塞達。恪勲泛愛、綏孝兼慈」
2. 馮邕妻元氏墓誌（宗室） 正光三（522）年10月25日
「長短殊命、夭壽異等。淑媛徧彫、金夫獨在」
3. 長孫士亮妻宋靈妃墓誌（広平宋氏） 永熙二（533）年1月30日
「氤氲瑞氣、昭晰靈祉。迺降淑媛、作嬪君子」
4. 高樹生夫人韓太妃墓誌（昌黎韓氏） 永熙二（533）年4月27日
「家鄴載興、豈唯良子。亦有淑媛、應茲世祉」

表6 北魏墓誌の「蘭蕙」の用例

1. 元颯妻王夫人墓誌（瑯邪王氏？） 延昌二（513）年12月4日
「奄同周南、窈窕永逝。胡爲当春、摧我蘭蕙」
2. 劉阿素墓誌銘（太原劉氏） 正光元（520）年10月
「英英孤秀、瑩瑩哲人。陵霜吐馥、冬華表新。獨有蘭蕙、磨而不磷」
3. 劉華仁墓誌銘（太原劉氏） 正光二（521）年3月17日
「照照蘭蕙、熒熒獨芳。臨霜吐馥、冬年表香」
4. 張安姬墓誌銘（東平張氏） 正光二（521）年3月29日
「熒熒蘭蕙、其華美矣。獨穎芳臻、茂而不殆」
5. 楊璉墓誌（弘農楊氏） 神龜二（519）年3月6日
「幼播蘭蕙、早冕纓簪。資文挺武、朝野齊欽」
6. 元子正墓誌銘（宗室男性） 建義元年（528）8月24日
金玉光明之姿、自懷抱而有異。蘭蕙芬芳之美、始言笑而表奇。
7. 元欽神銘（宗室男性） 永安元（528）年11月8日
金玉隨瓦礫同泯、蘭蕙從荊蓀俱盡。